[活動報告]

技術と社会部門－交通･物流部門 連携企画

第 2 回:船舶関係 合同見学会及び意見交換会 の報告

機械遺産委員会　緒方正則(関西大学)

前回の第 1 回は『日本の産業･技術の近代化は鉄道から』という観点から，2009 年 11 月 4 日(水)に埼玉県さいたま市にある鉄道博物館(愛称“鉄博”)で開催された．同館のはじまりは，鉄道開通 50 周年を記念して，1921 年 10 月 14 日(旧暦 5 月 12 日)の「鉄道の日」に東京駅－神田駅間の高架下に開設された鉄道博物館である．その後の名称変更など紆余曲折を経て，交通博物館として 1936 年より東京都千代田区神田須田町の万世橋のたもとに移設され，2006 年 5 月 14 日まで一般に公開されてきた．鉄道博物館は，その施設の拡充を図り，2007 年の「鉄道の日」にさいたま市に更新開設された．

第 1 回の合同部門行事の詳細は，本部門の加藤義隆幹事(大分大学)によりニュースレターNo.20 に詳細に報告されている．

第 2 回は『世界に誇る日本の造船技術』という観点から，2010 年 2 月 12 日(金)に東京都品川区のお台場地区にある船の科学館で開催された．出席者は本部門から 9 名(担当事務職員を含む)をはじめ総勢 27 名，見学会にはその内の 19 名が参加した．

会場の船の科学館は 1974 年 7 月に開設され，建屋全体が「クイーン･エリザベスⅡ」を模した形で，実船どおり6層(階)の構造となっている．部門合同会議に先立ち，同館の水域に浮かぶ旧青函連絡船「羊蹄丸」の船室で部門臨時総務委員会が開催された．

部門合同会議の第 1 部は交通･物流部門が設定した話題提供で，船に関する講演が 2 件行われた．

その(1)は庄司邦昭氏(東京海洋大学)による『海事技術史』．東京海洋大学は国の重要文化財「明治丸」を所蔵している．同船は 1874 年 11 月，英国グラスゴーで竣工，翌年横浜に回航されてきた．現在は江東区の海洋工学部越中島キャンパスに陸置されている．同学で開講されている海洋技術史の講義内容について門外漢の参加者が理解できるよう明快にお話しいただいた．また，都内に保存されている船舶(明治丸,宗谷,羊蹄丸,第五福竜丸)の見学を通したフレッシュマン･セミナーや，小学生のサイエンス教室の実施効果についても興味あるお話しをうかがった．

その(2)は中山俊介氏(国立文化財機構 **東**京**文**化財**研**究所)による『初代南極観測船「宗谷」の保存と修復』．同氏は三井造船の関連会社で造船の設計業務をされていて，船舶構造に関する卓越した知識を請われて“東文研”に転籍された経歴の持主でおられる．「宗谷」の生い立ちから現在までを，文化財保護の見地から詳細に説明いただいた．

二つの講演の後，初代南極観測船「宗谷」を見学した．同船は 1936 年に当時ソビエト連邦との交易のために長崎で建造された耐氷型貨物船「ボロチャベツ」であった．その後「地領丸」さらに 1938 年に「宗谷」へと改名され，海軍の測量船となり，終戦後は引揚げ船，灯台補給船を経て 1955 年に大改造を受け，初代南極観測船として 1956～1962 年の 6 次の運航に従事した．1978 年に海上保安庁の巡視船を最後に解役され，翌年より

船の科学館に係留されて一般公開されている.

船内の設備は，吼える 40 度・狂う 50 度・絶叫の 60 度という南氷洋の怒涛の嵐を切り裂いたとは想えない，古き良き外国航路客船の落ちついた風情が残されている．人間よりも，そりを引く樺太犬のために特設された巨大な冷房室にも感心する．詳細に観察すると，そこかしこに修復された厚化粧の痕跡や真新しい甲板材が見受けられた．講演された中山氏の記憶に留まる言葉は，“修復や改修の変遷の歴史もそれが産業遺産としての文化と言える”である．修復を手がける専門家の言葉は，機械遺産候補の選定を行う私たちにとっても，オリジナルの形を留めることが少ない“モノ”を評価するときの一つの指針になると考えられる.

本館にもどり，部門合同会議の第 2 部が開催された．第 2 部は技術と社会部門が設定した意見交換会で，本部門に設置された機械遺産委員会を代表して，緒方正則(関西大学)による『日本機械学会認定「機械遺産」の意義－交通機械を中心として－』の基調講演が行われた．1997 年の学会創立百周年を記念して「機械記念物」に認定された 29 件の工作機械，それが契機となって設立された専門委員会の活動実績，さらに 2007 年の学会創立 110 周年から始まった「機械の日・機械週間」の行事，「機械遺産」とくに交通機械の認定内容について，その意義と社会へ及ぼす効果の実例などが報告された.

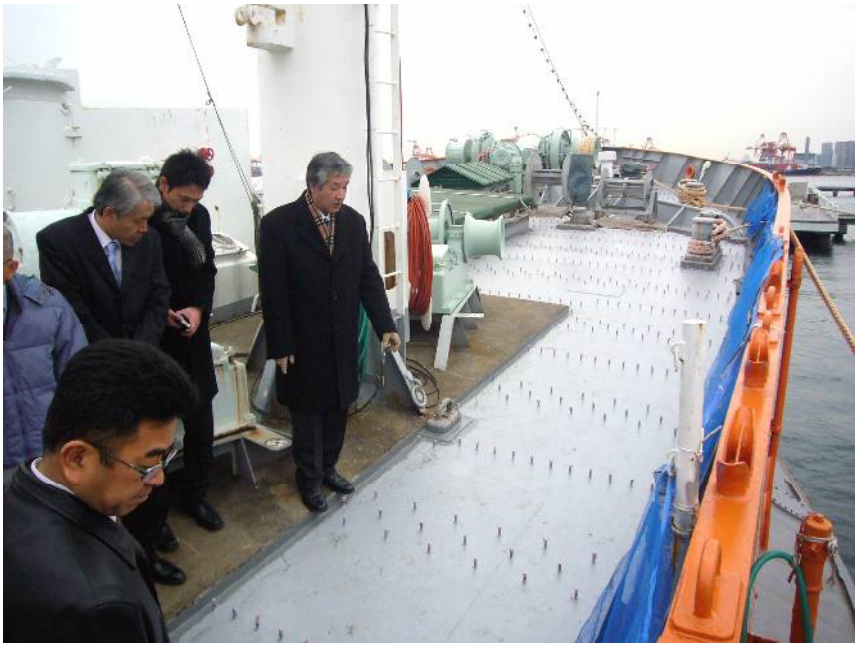
基調講演後，「産業遺産保存の意義と活用，および部門連携活動の今後の展開」について，小野寺英輝部門長(岩手大学)，黒田孝春副部門長(木更津工業高等専門学校)の発言を皮切りに，参加者一堂が熱心に討論を行った．とくに，場所を提供いただいた小堀信幸氏(船の科学館 学芸部長)の『当館のような設備の維持保全が財政的に厳しい状況下で，先々安定した事業を継続するためには，一体どの分野の遺産・記念物認定を受ければ良いものか，いささか思案します』との発言をいただいた.

本学会も含め，各学協会が遺産や記念物に認定する際には，被認定者（相手側）の事情も最大限に考慮することが必要であると実感した．『認定されるのは確かに光栄である．しかし授与者は認定するだけで済むが，その後の維持保存と，価値発生で税制に要する支出は，この経済情勢下では企業の負担が大である』との参加者の発言も見過ごせない.

また，平原国男氏から 2003 年 7 月に国際産業遺産保存委員会(TICCIH：The International Committee for the Conservation of the Industrial Heritage)が提唱した「ニジニータギル憲章」が披露され，産業遺産の保護と整備保存に関して大いなる参考となったことも報告したい.

活発な議論が続いたが定刻となり，盛会のうちに第 2 回合同部門会議は終了した.

このような企画は，来年度以降も「合同見学会＋意見交換会」として開催される予定である．今後はさらに，共通キーワードの創出と情報発信，研究分科会や合同セミナー・講習会なども開催される可能性がある．そのためには技術と社会部門に登録される多くの方々の積極的な参加を期待します.



「宗谷」の甲板材の修復状況を説明する講師の中山俊介氏(東文研)

「宗谷」後部甲板での集合写真

(C)著作権:2010　社団法人 日本機械学会 技術と社会部門